

楽器演奏者の演奏用衣服に関する基礎的研究

東京学芸大 鳴海 多恵子 ○片桐 愛

【目的】演奏会において演奏者は正礼装もしくは準礼装で臨むことが慣習である。楽器演奏時は特に上肢に活発な動作が伴う為、本来充分に活動性を考慮した衣服を用いるべきである。本研究ではより快適な演奏用礼服設計の基礎資料を得るために、礼服着用に関する意識・実態調査と楽器演奏時における上半身体表長変異の測定の両面から検討を行った。

【方法】(1)調査：男性演奏者 95 名を対象に質問紙によるアンケート調査（属性・演奏用礼服の満足度・演奏時にきつさを感じる部位・入手方法・演奏用礼服に対する印象）を行った。(2)上半身体表長変異の測定：演奏動作の特徴別に楽器を 3 分類し、その中からバイオリン(Vn)・トロンボーン(Tb)・トランペット(Tp)を選択、被験者はそれらの楽器演奏者の中から各 3 名ずつを抽出し、体肢の運動によって生じるデルマトグラフの伸縮変化を測定した。また、演奏動作を動作解析によってとらえた。

【結果】①調査の結果、演奏用衣服の着用により自信が湧くなど精神面によい効果がある反面、束縛される、動きにくいという認識もされており、アームホールの周辺に不快感を感じていることがらかとなった。②体表長測定の結果、体側面の垂直方向と左右の腋下点を結んだ水平方向、袖丈に大きな変化がみられた。③調査で拘束感を感じる比率が高かった部位と、体表長の伸びが大だった部位とに一致が見られた。④ Vn と Tb の演奏時の体表長変異は同傾向にあり、Tp よりも大きな伸びを示した。⑤ Vn と Tb は演奏時の脇線・腋下線における伸びが通常の 90 度前挙に比べて大きく、ゆとり量への配慮が必要であることがわかった。